

古高ドイツ語の絶対与格構文

手嶋竹司

いわゆる古ゲルマン語に属するいくつかの言語に、ラテン語からの影響と思われる表題の絶対与格構文なるものが当然のことながら翻訳文献に多くみられるのであるが、それを本稿では特に古高ドイツ語に焦点を当てて、それが持つ本来的な機能と、ゲルマン語に内在する本質的な文法的機能との関係について考察を進めてみようと思う。

ところでこの古高ドイツ語の絶対与格構文がラテン語の絶対奪格構文に対応するものかどうかは疑問の残るところである。これからの考察においてはいわゆる分詞が述語的に補足した形で名詞なり、形容詞に関わりをもつように結ばれる場合については考察の対象から外すことにする。しかしラテン語の場合と同様に古高ドイツ語に関しても、名詞もしくは代名詞が前置詞を伴うことなしに独立して与格ないしは奪格に立ち、述語補足的な分詞と結んで用いられるような統語的構造についてはこれを考察の対象とする。さてここに絶対というのは、このとき用いられる名詞または代名詞と分詞との結びつきが統語構造の面からみて一個の文に対応するような独立性を保っていること、及びそれに加えて、その名詞なり代名詞が文法格の上で定動詞との統語関係を結ぶことがないのをその本質的な特徴とする。このようなことからこの名詞もしくは代名詞を絶対的 (absolut), または統語面において他の文肢との接続関係をもたないということから *asyntaktisch* (独立的, または非连接的) と称してよいかとも思う。いずれにしても、この統語上の結合単位のなかの動詞的要素が *asyndetisch* に立つからである。このような特性からみると、ある意味において副詞、それも文全体に係る副詞と機能的に関連共通するところがある。またある面ではこの分詞は定動詞と相通じるところがある。例えば次のラテン語においては

vere inuente (春が来ると)

分詞 *inuente* (<*inuere*) が前の語 (*vere* <*ver*) に対して付加語的に作用していることから、意味構造の上からこれを絶対奪格構文に数えない文法家もある、一方統語構造の面から分詞が終始関連して立つ名詞と格において呼応 (Kongruenz) を求められるということから絶対独立したものとみる文法家もある。しかし F. Sommer¹ も言うように、

proposite sibi morte (死を眼前に思い浮かべて)

ここで名詞 *morte* (<*mors* の奪格形) の格は言うまでもなく統語的には独立しており、分詞 *proposite* (<*proponere*, 過去分詞の奪格形) は受動的述語動詞として名詞 *morte* に係っていることは明白である。

ラテン語のこの構文の翻訳を通じて古高ドイツ語に現れる、いわゆる絶対与格構文については、これまでも Grimm をはじめ多くの文法家の目に止まるどころであり、その用例も多く知られている。しかしこれまでのところではラテン語の翻訳からくる借用語法としてのみ扱われ、この語法の機能面での細部にわたる論究はあまりなされることがなかったように思われる。例えばときに Isidor の訳文に現れるラテン語奪格構文からの逸脱という現象への言及がなされる程度であった。そのようなわけで、これまでラテン語の絶対奪格構文を古高ドイツ語は絶対与格構文でそのまま踏襲した形で翻訳をしており、翻訳に際しての古高ドイツ語側のオリジナルな工夫と努力についてはほとんど考察されることはなかった。

例えば O. Erdmann² もこのことに関して Otfrid と Isidor の翻訳上の技法と Tatian のそれとの間に差異のあることは指摘している。また O. Behaghel³ は彼の *Deutsche Syntax* の第 2 巻の巻末にラテン語の絶対奪格構文を翻訳するに当って、これを絶対与格構文をもってした背景について Isidor からの例文を援用して説明はしている。

本稿では古高ドイツ語の翻訳文献にみられるラテン語の絶対奪格構文の翻訳に際して、それを絶対与格の形で借用的に文字通り踏襲している場合と、そうではなく意識し回避している場合とを文体論的並びに文法的機能の面からの考察を通して、その背後にある意味機能の差異にまで説き及んでみようと考えている。古高ドイツ語訳の基礎にある法則性がかりに翻訳者の文体上の配慮なり、意図から生まれたものであるとしても、Behaghel

も指摘しているように、これを Isidor に見る限りでは、一貫した文体的な特徴のあることが知られている。これを Notker や Otfrid の場合との比較の上にとってみるに、Isidor にみられる文体上の意図に発する技法の背後には、古高ドイツ語の、ひいては古ゲルマン語の本質的特性に基づく由縁のものに起因することがある。そうは言うものの、古高ドイツ語の翻訳文献に見るかぎりでは、この構文の適用にも範囲は狭く限定されていたと考えられる。

ところで後述するように、前置詞つき与格の副詞的用法は、古ゲルマン語にも勿論あったが、それがこの与格構文の適用範囲の枠組をなしていたと思われる。このように前置詞を伴わない与格がその支えをなすと同時に適用を限界づけていた。ラテン語の原典を形式並びに内容の面でも可能な限り維持継承しようと努めた古高ドイツ語の翻訳者達の意図を顧慮するとき、ラテン語の束縛に拘泥している限りでは彼らの母国語であるドイツ語の許容の範囲を敢えて踏み越えざるをえないこともあったであろう。

そこでまずこの辺のところを前もって結論的に言うならば、古高ドイツ語にみられる絶対与格構文の用法は基本的には定動詞に対して分詞が時間的關係において果たす位置関係を表すことにある。古ゲルマン語では、与格に統合吸収された印欧語の具格の機能の一つにその遠因を遡ることができないのではないか。この辺の事情を古高ドイツ語の翻訳文献資料に現れる用例を基に具体的な考察の上にとって以下論述を進めていくつもりである。

ところでまずはじめに Isidor と Monsee-Wiener Fragmente の Matthäus (マタイ伝) 訳 (以下 Monseer と略記) に見られるラテン語の絶対奪格が絶対与格の形をとらずに定動詞表現に言い換えられている例文から始めることにしよう。

Isidor 1, 18ff.

Dhazs suohhant aunr nu ithniuues, huueo dher selbo sii chiboran, nu so ist in dheru sineru heilegun chiburdi so daucgal fater chiruni. Dhazs ni saget apostolus noh forasago ni bifant noh angil gotes ni uuista noh einic chiscaft ni archennida. *Isaias so festinoda*, dhar ir quhad : 'christes chi-

burt huuer sia chirahhoda?’

Illud denuo queritur, quomodo idem sit genitus, dum sacrae natiuitatis eius archana nec apostolus dicit nec propheta conperit nec angelus sciuit nec creatura cognouit *esaia testante*, qui dicit: ‘Generationem eius quis enarrauit?’

(今やふたたびあらたにそのかたがどのようにしてお生まれになるかを尋ね求めるならば、そのかたの神聖なお誕生のうちから、神の御使いのものも聞き知らず、人の子一人聞き知るものなし。イサヤもまた次のように言って証言している、「キリストの誕生を語り告げたものがあるであろうか」と。

ここではラテン語の奪格構文は Isidor 訳では定動詞構文で言い改められている。ラテン語の奪格構文に先立つ

nu so ist in dheru sineru heilegun chiburdi so daucgal fater chiruni

をラテン語文に照らしてみると

dum sacrae natiuitatis eius archana nec apostolus dicit

(ところで、その人の聖なる出生の秘密のことは使徒も口にしていない)

かなりの隔たりのあることが知られる。このことも Isidor 訳の特質を示唆している。さらに同じ Isidor から

Isidor 10, 12ff.

Ibu nu christ druhtin nist, huuer ist dher uuerodheoda druhtin, dher fona uuerodheoda druhtine uuard chisendit?’

So ir selbo quhad dhurah zachariam:

Item si christus dominus non est, quis est ille dominus exercituum, qui a domino exercituum mittitur? *Ipso dicente in zacharia:*

(ところでもしもキリストが主ではないとすれば、人民の主(神)から派遣されたあの人々の主(神)は一体誰なのか、彼自身がサ

カリヤを通じて次のように言っておられるごとく：

また

Isidor 26, 14ff.

Dhea uuehhun auur in heilegim quhidim arfullant sibun iaar. *So ir selbo druhtin quhad zi moysi* :

Ebdomada namque in sacris eloquiis septem annis terminatur. *Dicente domino* ad moysen :

(週 (pl.) はしかし聖書では七年を意味する。主自らがモーゼに仰せられた如く：)

Isidor 32, 21ff.

Huueo auh fona abrahames samin uuardh quhoman druhtin iesus christus. Genesis saghet *huueo abrahames chibot uuas zi sinemu chnehte* :

Quod autem ex semine abraham futurus esset dominus iesus christus. Genesis ostendit *dicente abraham* ad puerum suum :

(アブラハムの種族からどのようにして主イエス・キリストがこの世にやって来られたのか、創世記はアブラハムがどのように自分の子に命じているかを物語っている)

ここに引用した例文ではすべてラテン語の奪格構文は Isidor の翻訳では定動詞の構文をとっている。これらの例文で見ると、ラテン語文の奪格構文の意味するところは一種の挿入的な説明文の代用をしている。

ついでラテン語の奪格構文に過去分詞の使われている場合をみてみよう。

Isidor 29, 19ff.

Dhuo azs iungist bidhiu quham gotes sunu endi antfenc mannes liihhamun, dhazs dhanne sie inan selbun chisahin, dhoh so chilaubidin. Endi dhazs mittingart *firleizssi diubilo drugidha* endi auur aruuegodu zi sines scheffidhes huldin.

Venit tandem filius dei et corpus humanum adsumpsit, ut dum uideretur crederetur, *Omissisque mundus daemonum simulacris* reconciliaretur gratiae conditoris.

(人民たちが神の子を目にして信じることができるように、そして世の人が悪魔の偶像を放棄し、彼の人(神の子の生みの親=創造主)の恩寵に回帰するようにと、ついに神の子はこの世におでましになり、人の姿をお召しになられた)

ラテン語の *videretur, credetur* という受動態の動詞が Isidor 訳では *chisahin, chilaubin* と能動態で表れている、かつ併せて *omissis simulacris* 完了(受動)分詞をもつ奪格構文が Isidor 訳では同じく能動文になっている。またここでもラテン語の奪格構文が定動詞の文に書き換えられており、それがまた目的文(Finalsatz)になっていてラテン語の原文と大きな距離をおいている。また次のような形の翻訳もある、

Isidor 29, 2ff.

Oh ir uuardh dhanne uuidharbruhtic, *mit unuuerndrißu gotes* chiunhreïnida dhazs undarquhedene chibot.

Ille autem rebellis effectus *contempta diuinitate* interdictum uiolauit praeceptum.

(彼(人)はこれから掟にしたがわなくなり、神を冒瀆するような振る舞いでもって神の戒律を犯した)

このところではラテン語の奪格構文が前置詞句によって表されており、このような細部にまで Isidor の訳の独自性の透徹していることを現に想い知ることができる。ここでついでに Isidor 訳がラテン語文の逐語訳ではなく、かなり原典から離れて、ドイツ語の特性に順応して無理のない表現で訳し出そうとする苦心の程を窺わせる例文をもう一つ挙げておこう。

Isidor 4, 4ff.

Aefter dhiu dhazs almahtiga gotes chiruni dhera gotliihhun christes chiburdi chimarit uuard, hear saar after nu mit gareuue bilidum dhes heilegin chiscribes eu izs archundemes, dhazs ir selbo christ ist chiuuissu got ioh druhtin.

Post declaratum christi diuinae natiuitatis mysterium deinde quia idem deus et dominus est exemplis sanctorum scripturarum adhibitis demonstramus.

(キリストの聖なる誕生の全能の神の秘密が告知されるや、直ちに聖書からの直接の引用でもって彼自らがキリスト、神そして主であることの確かなることを汝らに証明しよう)

ここでイタリック体の部分を比較照合すれば一目瞭然ラテン語の前置詞の構文に対して Isidor 訳では副文を使って言い表されており、しかもそこではラテン語の *declaratum* (<*demonstrare*) 訳語である *chimarit uuard* と副文における動詞の位置として文末に置かれているなど、かなり大胆な翻訳がなされている。さらに特徴的なことは副文を導入する接続の語句 *Aeften dhiu dhazs* を受ける形で主文の文頭に副詞 *hear saar after nu* を置き、主文の動詞 *archundemes* (<*archundan*) の目的語文を先取りする形で代名詞 *izs* (=nhd. *es*) を置くなどして、ドイツ語のもつ自然の流れに沿った表現がとられている。この辺に Isidor 訳がかなり読者を意識して翻訳に挑戦した努力の跡を止めている。

つぎに Monseer Fragmente のなかの Matthäus 訳をみてることにしよう。

Monseer XX, 5f.

Katuualota auuar der brutigomo slaffetun allo enti slefun

Moram autem faciente sponso dormitauerunt omnes et dormierunt

(しかし彼女花婿がやってくるのが遅れたので、皆のものは眠くなり寝込んでしまった)

ここにも定動詞の構文に移し換えられている。Tatian 訳ではラテン語文を踏襲した訳がとられている。

Tatian 148, 3

Tuuuala tuonti themo brutigomen naffezeitun allo inti sliefun
Tatian 訳で一つラテン語文と異なる点があげられる、それはラテン語の分詞が奪格であるのに対して、Tatian では分詞は主格に立っている。

Monseer VII, 20

*Innan diu aer daz sprah za dem folchum see siin muoter
enti bruoder stuontun uze sohhitun siin gasprahhi*

*Adhuc eo loquente ad turbas. ecce mater eius et fratres sta-
bant foras querentes loqui ei*

(彼キリストが人々に話をしている間に、見よ、彼の母と兄弟た
ちは外に立って、彼との話し合いを望んで待っていた)

ここにもラテン語の奪格構文に対して接続詞の導入による副文が用いら
れている。ここでも Tatian の方は前と同様にラテン語を踏襲してい
る。

Tatian 59, 1

*Imo noh thanne sprehentemo zi then menigin, senu sin muoter
inti sine bruoder stuontun uze, suohtun inan zi gispreh-
hanne*

Tatian の場合には最後のラテン語の *loqui ei* の不定詞が目的を意味す
ることから前置詞 *zi* を用い、ドイツ語の慣用に応えるべく語順を改めて
いる。

また Moseer の訳には次のような例文がある、

Monseer XX, 3f.

*Oh deo unuuisun fimfi namun mit im leohtchar ni namun mit
im olei*

*Sed quique fatuae acceptis lampadibus non sumserunt oleum
secum*

(五人の愚かな女どもはランプは持ってはいたものの、油を持っ
てはいなかった)

この部分の Tatian は

Tatian 148, 2

*Oh fimf dumbo intfanganen lichtfazzon ni namun oli mit in
文字通りラテン語の文をそのままに翻訳している。*

Monseer I, 3f.

enti so inan gahsahhun batun daz er.....

et uiso eo rogabant, ut.....

(彼ら(町の人たち)が彼キリストを見たとき、彼らは乞い求めた)

Tatian 53, 12

inti gisehanemo imo.....

ラテン語の奪格構文に対して Monseer の方は副文になっているが、一方の Tatian ではラテン語をそのまま踏んでいる。

なお次の例文ではラテン語の方では分詞が完了(受動)分詞であるが、Monseer では受動の定動詞表現をとっている、

Monseer IX, 14ff.

uuirdt imo gataan sum pina arfolget durah uuort saar gasuuihhit

facta autem tribulatione et persecutione propter uerbum, continuo scandalizatur

(み言葉の故に苦難と迫害が加えられると、すぐに自分の節度をまげてしまう)

Tatian 75, 2

gitaneru arbeits inti ahtnessi thuruh thaz uuort sliumo uuirdit bisuihhan

これなどは古高ドイツ語ではいまだ受動表現形式が確立していなかったこと、すなわち過去分詞が受動分詞の現在形として整っていなかったことによるものと思われる。Monseer で定動詞が文頭にあるのは、主文の文頭の副詞 *saar* と併せて考えるならば、ここにゲルマン語に共通する定動詞文頭の *wenn* 文章の現れとみることもできる。

Monseer XXIII, 21ff.

Duo morgan uuarth kengun in sprahha alle dea herostun biscoffa enti dea furistun dero liuteo quatun uuidar ihuse daz sie

Mane autem facto, consilium inierunt omnes principes sacerdotum et seniores populi aduersus iesum, ut

(朝が来ると、司祭の最高の位にある人たちや人民のなかで最高の権力を持つ人たちがすべて法廷に集まってイエスに不利な証言をした)

Tatian 189, 1

Morgane giuortanemo

ここでも Monseer では、ラテン語の奪格構文を定動詞受動の副文の形をとっている。

ここまでの考察からも明らかなように Isidor と Monsser に共通する特徴は、まずなによりもドイツ語の慣用に叶うようにという意図的な努力の跡を窺わせるが、なかでも Isidor にはそうした傾向の強いことを知ることができる。

こうした Isidor にもラテン語の奪格構文から離れずに踏襲している例がある。そうした例文をこれからしばらく調べてみることにする。

Isidor 17, 21 ff.

So sama so auh araughit ist in isaies buohhum eochihuu eliihhes dhero heideo sundric undarscheit, selbemu dhemu gotes sune quhedhendemu :

In esaia quoque sub propria cuiusque persona distinctio trinitatis dicente eodem filio ita ostenditur :

(同じようにイザヤ書には人々の各々の特徴が記されている、神の子自ら次のように申されるときには)

冒頭のところで簡単にはあるが触れておいたように、古代ドイツ語、なかでも翻訳の文献に見る限りでは、絶対奪格構文の用いられる場合には、そこには意味形態的にみて時間的 (temporal) な意味合いが強く支配的であるように思われる。そのことは上の Isidor からの例文にも見られる。またここではそのような時間的な意味合いのほかに、前文に対するいわば付帯的な条件を追加補足しているとも受け取れる側面のあるようにも解釈できる。そのことはラテン語が定動詞を文末に置いているのに、

ドイツ語では前の文が定動詞第二位の主文の形式をとっていることもその辺のことを物語っているようである。ここでついでに Isidor の訳文がオリジナルな面を発揮している点を指摘しておく、ラテン語の前置詞構文を独立した文にまとめるために、その中の一部を分解し拡大解釈して主文の主語にもってくるという優れた工夫を凝らしている。

Monseer XXXVII, 26—XXXVIII, 1

..... *unseremo truhtine ihū xpē eiscontemo* huuenan inan man meintin daz aer uuari enti mislihhero ment manno uuarun dea iungirun antuurtente, Auuar *unsaremo truhtine fragentemo enti quedantemo* Inu huuenan meinit ir daz ih sii Antuurta petrus Du bist

Ipsē denique domino iesu christo requirente, quemnam homines dicerent eum esse, et opiniones uarias hominum discipulis respondentibus, rurusque domino interrogante et dicente: Uos autem quem me esse dicitis: Respondit petrus: Tu es

(われらが主イエス・キリストがその人が誰のことを指しているのかと問われたとき、人々の考えはまちまちですと弟子たちが答えた。再びわれらの主がお尋ねになられて、「汝らはその人が私であると(言う)思っている」。と問われたとき、ペテロは言った、「あなたは……」と

ここではラテン語の絶対奪格の構文は、そのままドイツ語に翻訳されている。ところで今この奪格構文の意味形態を考えてみるに、上の拙訳の日本語文からも読みとることができるように、時間的な意味を持っていることは理解できるように思う。またここにもドイツ語の慣用への配慮が窺える。すなわちラテン語の間接話法が不定詞の構文によって言い表されるのに対して、ドイツ語の方では接続法の動詞を使った副文になっていることも併せて指摘しておきたい。

これまでのところは奪格に立つ名詞が実名詞 (Substantivum) であったが、以下これからしばらく、それが代名詞である場合について考えてみ

よう。

Monseer XIV, 17f.

Enti *im uzfarantem fona hierihho* folgetun imo folc manegiu

Et *egredientibus eis abhiericho*, secutae sunt eum turbae multae

(彼らがエリコの町からでると、大勢の群衆が彼キリストの後に従った)

Tatian 115, 1

Inti *in uzgangenten fon Hiericho* folgeta inan mihil menigi

(訳=上に同じ)

Monseer XXII, 3f.

Im duo za nahtmuose

Cenantibus autem eis, accepit iesus panem et benedixit

(彼ら弟子たちが夕食についたとき、イエスはパンをとり神を讃えた)

Tatian 160, 1

In tho zi muose sizzenten intfieng ther heilant brot inti uuihtita

(訳=上に同じ)

つづいてもう1例を挙げれば

Monseer XXIII, 9f.

Imo duo uzcangantemo durah dea turi kasah inan ander diu

Exeuente autem illo ianuam uidit eum alia ancilla

(彼が戸口から出たときに、他のもう一人の女奴隷が彼を目にとめた)

つぎに完了詞の例を拾ってみると

Monseer XXIV, 28f.

Im duo kasamnotem pilatus

congregatis ergo illis dixit pilatus

(彼らが集まったときにピラトは言った)

Tatian 199, 3

In tho gisamanoten quad Pilatus:.....

これらのほぼラテン語の構文をそのまま踏襲していると思われる訳文、すなわち絶対奪格をドイツ語で絶対与格の構文で訳しているような例文に共通する特徴として挙げられる点とえば、これらがともに意味形態として時間的なものを表現価値としてもっていることである。そのことを裏付けるものとして、この構文には一様に時間の副詞 *tho/duo* が用いられている。もう一つの特徴的なことはラテン語とドイツ語訳とでは(人称)代名詞の占める位置が分詞を挟んで逆になっていることである。ラテン語に窮屈なまでに忠実な Tatian でもこの点に関しては他のものと軌を一にしている。ここには Behaghel の説くところのいわゆる *wachsender Satz* の法則が働いていると見ることができよう。なおこれらの例文の完了の分詞はドイツ語では動詞の表す動作、状態の完了後の状態を表すものと解すべきであろう。

つぎの例文をみてみよう。

Isidor 43, 19f.

So chiuuiso ist dhazs *imu arsterbandemu* siin fleisc ni chisah enigan unuuillun.

Utique quia *moriens* caro eius non uidit corruptionem

(彼キリストがみまかりしとき、そのかたの肉体には腐食はみられなかったのは確かなことである)

ラテン語の方では、分詞は *appositiv* (同格的) に、すなわち文法形式の上では *caro eius*=*sein Körper* に懸かっているが、意味内容からは *eius*=*sein* (彼の) に関わるものとして *prädikativ* に立っている。Isidor 訳の方ではそれがラテン語からは離れて独自に絶対与格構文にしている。ここでも上述の如くに人称代名詞を分詞の前にもってきている。なおここでも、この絶対与格の構文のもつ意味機能は時間的な関係を表している。

いまこのことを Monseer からの例文によって確かめてみよう。

Monseer XXV, 10f.

enti so sie inan gasahun hnigun za imo

et videntes eum adorauerunt

(彼らは彼を見たとき彼にひざまずいた)

とラテン語の *videntes* (現在分詞複数主格) がここでも Monseer も時間の副文で表している。このことは前の Isidor にあるような絶対与格の構文が意味形態として時間的な関連を表すものであるということを傍証しているように思う。

Isidor 31, 18ff.

unser druhtin iesus christus, dher unsih dhurah iordanes runsa, dhazs ist dhurah dhea gheba gheba dhera heilegun daufin chiheilegode, allem sundono chunnum ardribenem ioh allem herrum ubilero angilo arflaugidem, unsih dhurahleidit in dhea chiheizssenun lantscaf,

nobis dominus iesus christus erat futurus? Qui nos per iordanis fluentia, id est per baptismi gratiam sanctificatos et omnibus uitiorum gentibus expulsis uel angelorum malorum hostibus effugatis perduceret ad terram repromissionis

(私たちがヨルダン河を渡って、すなわち聖なるヨルダン河の水で洗礼を施すことによって私たちが被い清めてくださり、すべての悪徳を追い払い、悪しき天使の悪者を追い散らして下さって、約束の地へとお導きくださるところの我らが主イエス・キリスト)

ここでも Isidor の訳はラテン語からは距離を置いた翻訳をしている。例えばラテン語の *sanctificatos* と *nos* とを appositiv にしているが、Isidor はそれを定動詞による文章表現にしている。さらにラテン語の *qui* 以下の疑問文を関係文にするなど、かなりの意識をしている。ところで問題の奪格構文については、このところでは時間的な関わりに併せて具格的な機能をもっている。すなわち一種の付帯的な条件を付与する形の働きを

しているとみることができる。

さてここまでは Isidor と Monseer に焦点を当てて問題の構文の翻訳に現れる文体的な取扱いと、その意味機能のもつ具体的な現象について考察してきたが、これを傍証するという意味合いから、一つ Notker からの例を挙げておこう。

Notker II, 71, 15ff. (Martianus Capella I.)

Venit ex altera fortuna et ualitudo faborque pastor *manibus refutatis*. quippe hi in conspectum iouis non poterant uenire. Fón déro éinliftún chám díu uuíllsálda únde uuílmáht. únde fabor der hírte. *dæn únholden feruuórfenen* unánda díe nemáhton chómen fúre iouem

(11番目のものからは運命の女神 Fortuna と Valentudo と羊飼いの Fabor がやってくる、ところが一方の敵意をもつ神々は Jupiter の前に顔をみせることがかなわず追い出される)

この Notker の例文でも 下線の箇所にも前文に対して、いわば付帯的な条件、ここでは除外文体的な意味機能をもっている。Monseer からもう一つ例を挙げて置こう。

Monseer VIII, 9f.

danne uphstiganteru arheigetun

Sole autem orto estuauerunt

(太陽が上ると焼け焦がれた)

ここでもまた同じように、完了後の結果としての状態に併せて時間的な継起関係を表している。参考までにこの箇所の Tatian をみみると、

Tatian 71, 3

ufganganteru sunnun furbrantu vvurdun

となっている。さらに試みにこの箇所の Luther 訳をみってみるに、

Mt. 13, 6

als aber die sonne auffgieng, verwelcket es

と時間関係を表す副文で表されている。

ところで以前にラテン語の奪格の構文の翻訳に前置詞のついた形の表現形式の用いられていることを指摘しておいたが、それをいまここで改めて

考えてみることにしよう。ここにその一部を再掲すると、

Isidor 31, 14f.

after moysise dodemu endi dheru euu zifareneru ioh dhem
aldom gotes chibodum bilibenem

defuncto moyse, id est defuncta lege et legali praecepto
cessante,

(モーゼのこの世を去りて戒律の廃れ、古き神の掟が地に落ちて
顧られなくなった後)

ラテン語で絶対奪格の構文に終始しているのに対して、Isidor の訳ではい
わゆる与格に前置詞が付け足されている。このことはドイツ語では前にも
述べたように絶対与格の構文は時間的関連においては定動詞との同時性を
意味する。したがってこのところのように時間の継起を明確にしようとす
ると、このように前置詞によって事象の継起の次第を表すということにな
らざるをえないであろう。

ところでこれまで 比較対照のために挙げた例文からも 推察 できるよう
に、Tatian の訳はラテン語の文章に忠実で、ほとんどラテン語の逐語訳
と言ってもよいほどである。その Tatian にもその数は僅少ではあるけれ
ども、ラテン語に距離をおいた翻訳のなされている場合がある。今それを
Monseer 訳文と比べてみると、

Monseer X, 12ff.

Auh ist galihsam himilo rihhe demo suohhenti ist guote
marigeroza *funtan auh ein tiurlih marigreez* genc enti for-
chaufta al daz aer

Iterum simile est regnum caelorum homini negotiatori
quaerenti bonas margaritas. *inuenta autem una pretiosa
margarita*, abiit et uendidit omnia quae

(天国は良き真珠を捜し求めている人に似ている。高貴な真珠を
見つけだすと 出かけて行って 前からのもの併せて 売り払ってしまう
う)

Monsee 訳の方はラテン語に倣って絶対主格構文で表されている。これに対して Tatian は次に示すように、

Tatian 77, 2

Abur gilih ist rihhi himilo manne suohhentemo guota merigriozza. *Fundanemo thanne einemo diuremo merigriozze gieng inti furcoufta ellu thiu her*

と珍しくも、絶対与格の構文で訳している。このことから推して察せられることは、下線の部分は後続の定動詞の文に対して時間的な関連をもつことは疑問を挟む余地もないほど明白である。このことに思いをいたすならば Tatian の訳に絶対与格の構文がとられている理由も納得できるのである。

前に古高ドイツ語にはいまだ受動の表現形式が文法上の形式としては整っていなかったというように触れたが、上に挙げた例文に絶対与格の構文はラテン語にならって受動の形がとられている。しかしこのような受動の分詞をもつ絶対構文はやはり古高ドイツ語には馴染みの薄いものとして能動表現に改められている。例を挙げると、

Monseer XX, 3f.

namun mit im leochtchar ni namun mit im olei

acceptis lampadibus non sumserunt oleum secum

(灯火を手にもったが油をもってはいなかった)

また Tatian にもそうした例がある。

Tatian 193, 5

Girate giganganemo couftun fon then accar leimuurhten

Consilo autem inito emerunt ex illis agrum figuli

(彼らは相寄り相談してそれを元手に瀬戸物屋の畑を買った)

上例の示すようにラテン語の受動表現を避けて能動表現に言い改めているなどのことから推し量って考えると、この絶対与格の構文にはまだまだかなりの抵抗感があったようである。もう一つここで考慮にいれて置かなければならないことがある。それはこれらの構文では分詞の主語にあたるも

のと、定動詞の主語とが異なる場合のあるということである。そのような場合には、

Monseer XV, 15f.

enti santa siniu heri forlorta dea manslagun

missis exercitibus suis perdidit homicidas illos

(彼＝自分の軍隊を派遣して殺人者どもを殲滅した)

にみられるように、動詞の態を変えて双方の主語を統一して表す手法がとられることがあった。しかし古高ドイツ語から見る限りでは、絶対主格ないしは絶対対格の構文にはいまだかなり強い抵抗があったようで、先の Monseer の X, 14 のような例はラテン語の原典から極力離れまいとする窮余の策であろう。そして新高ドイツ語の時代になって最終的に絶対主格または対格の構文が広く使われるようになるのはフランス語からの影響によるものであって、そのことによって新しい息吹を吹き込まれたからである。また一面ではラテン語のみならずドイツ語においても古くより主格と対格が多くの場合に同形をなしているということも、こうした動向に寄与したこともあながち否定はできないであろう。

これまで例証からラテン語の奪格構文の翻訳に当たったの古高ドイツ語の対処の仕方には大きく 2 通りあることがわかった。一つには絶対奪格に対応する絶対与格によるものと、それを定動詞の文に直して訳す訳し方があり、それが前者の与格による構文のときは、それが定動詞と時間的関連の意味機能をもち、かつその際に定動詞との同時的もしくは、定動詞の文にたいして時間的に付帯条件としての意味機能をもつような場合であることを述べた。ラテン語の奪格構文がそのような意味機能にあてはまらないような時には、定動詞の文に拡大して翻訳されることの多いことも分かった。

そこでこのような考察の結果を踏まえて Otfrid や Notker のものについても考証し、あらためて確かめてみることにする。まず初めに Otfrid と Notker に現れる絶対与格の場合からみていくと、

Notker I, 39, 10ff.

Atqui et tu insita nobis. pellebas de sede animi nostri

omnem cupidinem mortalium rerum. et non erat fas locum
esse sacrilegio *sub tuis oculis*. Tríuuo béidiu sínt uuár.
ioh táz tû mír ínneuuésentíu benómen hábest álla uuérlt-
kíreda. íoh mír únmuoza fóne díu uuás. dáz íh méin zuo
mír líeze. *dir ána séhentero*

(あなたが私から私の心に巢食う俗世の煩惱を取り除いて下さった。だから私はあなたの目の前で私のこの身に悪徳をゆるすことはできないということはなんら疑いの余地もございません)

ここではラテン語の前置詞句 *sub tuis oculis* (あなたの見ていらっしゃる目のまえで=*in deiner Gegenwart*) が *dir anasehentero* (あなたが見ておいでになられるときに) と絶対与格の構文で表されている。Notker からそのほかの例を拾ってみると、

I, 20, 27

imo lebendemo (彼のこの世にあるとき)
eodemque superstite

I, 20, 28

mir zusehentero (わたしが端で眺めているとき)
me astante

I, 83, 21

Tanne insizzenten (彼らが座っているとき)
Cum eisdem insidentibus

I, 19, 8

In standen (彼らが踏みとどまっているとき)
Illis manentibus

なおこのほかにラテン語とは独立して次のような例がみられる。

III, 178, 18

imo chedentemo (彼が言うとき)

III, 178, 19

imo gebientemo (彼が命じるとき)

などかなり多くの例が挙げられる。このほかに完了分詞の例として、

III, 133, 11ff.

Lauabo inncentes manus meas. Ih tuáho míne hende mit únsundigen. dâz chít. ih îlo háben réiniu uuerh. also innocentes hábent. Et circumdabo altaretuum domine. Vnde *démo getânemo*. umbefáho ih dînen altâre

(私は私の汚れない手で自分の手を洗おう、ということはすなわち私は汚れない潔白な行いのできるように努めよう。そういうことがなされたときに私はあなたの祭壇を手に抱きま

す)

Boethius I, 222, 13

Temo infarnemo (これを堪え忍ぶとき)

Hoc sublato

Otfrid からは

IV, 13, 53f.

„Nist er“, quadun, „thare ther io so irfare,
gisunten uns thir derien; wir wollen thih in werien!“

(私たちが健康である限りは、あなたに敢えて害を加えようとしてつかまえる者はいない。私たちはあなたを彼らからお守りします)

この *gisuntenuns* の裏にはラテン語の *salvis nobis* という奪格の構文(形容詞)があることが考えられる。この Otfrid 例文からもこの与格は Instrumentalis の意味機能に由来する付帯条件の用法に帰着するように思われる。このことから推し量るに古高ドイツ語の文章語(Schriftsprache)では、この絶対与格の構文の慣用化はかなりのところまで進んでいたように思われる。

Notker I, 358, 22ff.

Si lêret unsih. táz ménniskôn tâte. uuóla ze léibo múgen

uuérden. sô filo iz ze íro sélbero natura gestât. únde íro déro hálb nehéin nôst neíst. únde sie áber ze léibo nemúgen uuérden. *gôte ána séhentemo*

(もし人間の本性にもとるところがないかぎり、人は幸せな人生を送ることができるであろう。そしてそのことのために人の苦しみはなくなる、がしかし、神の御前に出ては、その苦しみは存続することはできずに消えてなくなると彼女はわれわれに論している)

gote anasehentemo とは「神の御前では=*vor den Augen Gottes*」ということであって、ここにも時間的な意味を含んだ付帯条件の機能が働いている。

Notker I, 246, 24ff.

Nam si ea quae paulo ante conclusa sunt. inconuulsa se-
ruantur. *ipso auctore* de cuius nunc regno loquimur. cog-
nosces. semper quidem bonos potentes esse. malos uero
abiectos semper atque inbecillos. Kehúgest tu dés uuóla.
dáz íh tir fóre féstenôta. sô geéiscôst tu dáz *kôte hél-
fentemo*. fône dés ríche uuír chôsoên. dáz tie gûoten ío
máhtig sínt, únde die úbelen ío feruuórfen únde âmáhtíg
sínt.

(私が以前にはっきりと証明してみせたことをあなたがよく覚えておいでならば、あなたは神の御国(恩籠)のことについてはこれからお話ししますが、その神のお力添えがもしあるならば善良な人々が導き手となり、悪しき人たちが追放されて無力なものに成り下がることありうることをお認めになるでしょう。そこで、あなたは、もし神のお力添えがあれば、善人は常に力を持ち、悪人は見捨てられ、無力である私たちが神の国について語ることをお求めになられています)

kote helfentemo はラテン語の *deo adiuvante* の訳であって絶対尊格であり、この形は Otfrid にも出てくる。

Otfrid V, 25, 7

Bin *gote helphante* thero arabeito zi ente

(神のお力添えを待てこの仕事を終えることができた)
この Notker と Otfrid のいずれにおいても 付帯条件の意味機能であることに変わりはない。

Notker I, 30, 11

temo chúnige uuízentemo (王がご存知であれば)
Rege cognoscente

Notker にも完了分詞の例もある。

I, 246, 2ff.

Nam imperante florenteque nequitia. uirtus non solum premiis caret. uerum etiam sceleratorum pedibus subiecta calcatur. et in locum facinorum supplicia luit. Íh méino dáz tien áchusten uuáhtesóntên. únde frámmert tientên. diu túged nieht éin dánchez tárbêt. nube ióh únder dero fertânôn fúoze getréten uuírt. únde uuéuuûn lídet fúre die úbelen.

(こうした悪徳が世を支配し、これから先も幅を利かしていくことがあれば、美德は足の下に踏みつぶされるか、さもなければ心悪しき人々のために苦しみ喘ぐことになると私は思うのである)

ここにもやはり時間的關係に基づいた付帯条件の意味形態が窺われる。また分詞が名詞の前に置かれている場合もある。

Notker I, 18, 22f.

Sâr hinauertribenero naht (暗い夜の帳があがるやすぐに)
Tunc discussa nocta

I, 325, 5

geiegenero note (強制を許すことにでもなれば)
recepta necessitate

このところを現代ドイツ語で言い表すとすれば、

sogleich bei vertriebener Nacht

および、

bei zugestandenem Zwang

とでも訳してよかろうかと思う。

Notker I, 56, 16ff.

Si turbidus auster uoluens mare. misceat aestum. Úbe
óuh ter uuínt mískelôt tia céssa. únde den mére getúot
uuéllôn. Mox *resoluto caeno*. obstat uisibus sordida unda.
Sâr hórouue uuórtenemo. uuéret síh tien óugôn daz trúoba
uuázer.

(もしも風が波をかき立て、海に波を巻き立てることにでもなれば、汚い泥水が巻き起こり、すぐさま濁った波(水)が視界を遮るであろう)

ここでは Notker の訳とラテン語とでは語順が逆になっていて、Notker では分詞が先になっているが、このこともまた前に Isidor のところでもみられたことであって、古高ドイツ語では分詞を前にもってくることによって述語動詞の場合と区別しようとする傾向のあることに触れたが、今ここにもそのことが作用しているのかもしれない。なおここに Notker が副詞 *sâr* を添えているのも、ここで絶対与格の構文が時間的な意味合いを含んでいることを明示している。

ここに立つ過去分詞はいわゆる完了時称の場合のように前時性 (Vorzeitigkeit) を表すのではなく、完了後に結果する状態を時間的に定動詞と同時もしくは継起的なものとして表示するものである。

Otfrid V, 12, 13f.

Wio er selbo quami (thaz ist seltsani)

bisparten duron thara zi in

(まことに不思議なことに扉が閉まっているというのに彼キリストはどうしてやってきたのだろう)

これもラテン語の *clausis januis* という奪格構文を訳したものである。

Notker の翻訳文にもさきに Isidor や Monseer のところでみたと同じように、ラテン語の絶対奪格の構文を絶対与格の構文で訳さないで、回避している場合がある。こうした場合にはやはりドイツ語の慣用に抵触するか、またはドイツ語のもつ文法的掣肘、拘束によるものであろう。

Notker I, 119, 2ff.

Nouimus quantas dederit ruinas. qui quondam *urbe flammata. patribusque cesis. interempto fratre. ferus maduit matris effuso cruore.* Úns íst uuóla chúnt. uuélên súid nero téta. tér roma ferbránda. únde *daz hêrtuom slúog. sinen brúoder slúog.* únde síh tára nâh plúotegôta grimmelicho. mít sínero mûoter férhplúote.

(かつてローマを焼き尽くしたネロがどのような壊滅的行為をしたか、また元老たちを殺害し彼の身内の兄弟をも殺害したうゑに、自分の母親の心臓の血を自分の身体にあびたことはわれわれのよく知るところである)

このところではラテン語の奪格構文は *daz* (= *daß*) 文章と関係文で訳し出されている。

Notker II, 62; 21ff.

Nondum mea prompta. i. *prolata sententia.* exspecto quid suadeas. Íh nehábo nóh târána *nieht penéimet.* fernímo géрно uuáz tu is râtêst

(私はまだそのことについて心を決めていなかった。あなたがそのことについてどのような助言、忠告を与えてくれるのかを知りたい)

ここでは定動詞構文に訳されている。ここで Notker においてもラテン語の奪格構文が時間的関連を指していないような時には、いわゆる定動詞を用いた文に書き改めていることを知るのである。

これまでの Notker の訳に現れるところを総合して結論づけてみるに、彼の場合にも Isidor などの例文に認められる用法と大きな変わりはないようである。従って古高ドイツ語では絶対与格の構文はいまだ翻訳文においては許容はされるものの、文体論の上ではある限られた一定の機能と効果をもっていたが、そこには翻訳による借用の文体的価値を拭い去ることはできなかった。この文体のもつ効果にも限界があって、それを越えるときはドイツ語の文法体系から逸脱することになる。その限界とは、これまでの考察と説明からも明かなように、まず定動詞の文にたいして時間的に

同時的な関係にあることを表示する。そしてそれと関連して定動詞構文への付帯的な条件を添えるという意味機能をもっていた。またこの機能というのは本来「具格」の機能に由来するものであった。そうしたこの構文の持つ意味機能を超えるところでは、ほかの構文に改められることが多かった。それも定動詞構文によることが一般常套的であった。そのことはつぎの例文をみてもわかる。

Notker I, 156, 2ff.

Quamuis auarus diues *fluente gurgite auri*. cogat non expleturas opes. Tóh ter frécho mán. sámó ríche uuótenêr. sámoso ímo zûorínne daz cöld. sínen scâz tés ímo níomêr fóllûn nedúnchet. kehûfoe.

(たとえ財宝への欲望の強い人が金 (Gold) が大量に彼のところに流れ込むほど豊かになっても、その人は決して十分だとは思わないで、財宝をますます多量に、しかも高く積み重ねようと思うであろう)

ラテン語の奪格構文はここでは比較、比喩的な意味構造をもっていると解されるところがあることから、Notker は動詞を接続法にした要求話法の願望文に拡大解釈をして訳している。ついでに申し添えるならば、古高ドイツ語では *toh* (*thoh*) に導かれる文の中では動詞は接続法が用いられた。ちなみにここでは

kehûfoe < kehûfon=*nhd.* aufhäufen

zûorínne < zûorinnen=*nhd.* zuffießen

これに続く文章は

úmbe dáz negebrístet ímo níô sórgûn

(それ故に彼には苦勞が絶えないのである)

Notker I, 146, 4ff.

Sed ad hominum studia reuertor, quorum animus repetit suum bonum. tametsi *caligante memoria*. Nû uuíle íh áber chád si ságen. uués tie líute flízig sínt. téro mûot io nâh iro gûote sínnet. tóh iz óuh *úngéhúhtigo dâranâh sínne*.

(彼女の言うには何事かに真剣に励んでいる人たちの心は、常に

自分の幸福に向けられている。たといそれが臍気ながらも、その方向に心に向けているとはいえども)

ラテン語奪格構文に *tametsi* という譲歩の文意を添える語がついている。これはドイツ語では絶対与格の構文形式で言い表すことはまず不可能に近いと言わざるをえない、そのことの故に Notker はここでも譲歩文を導入する接続詞 *toh* を用いて副文の形でこれを訳している。

Isidor 26, 16f.

Dhea uuehhun aaur in heilegim quhidim arfullant sibun iaar. *So ir selbo druhtin quhad zi moysi: ...*

Ebdomada namque in sacris eloquiis septem annis terminatur. *Dicente domino ad moysen: ...*

(聖書に言われている週 (pl.) とはしかし七年のことである。主がモーゼに申されたいるように)

この奪格構文はいわば注記の用をなしている。この意味からドイツ語が定動詞構文をとっていることが納得できるというものである。これをつぎの例文と比較対照してみるに、

Monseer XXXVII, 30—XXXVIII, 2

Auar unsaremo truhtine fragentemo enti quedantemo Inu huuenan meinit ir daz ih sii. Antuurta (petrus) Du bistrursusque domino interrogante et dicente: Uos autem quem me esse dicitis. Respondit petrus: Tu es

(ところでお前たちは私を誰だと思っているのかと、われらの主が尋ねて言われた時、ペテロは答えて、あなたは……ですと言う) (Augustinische Predigt)

この場合には前後の文脈からもラテン語の奪格構文は時間的な意味機能において立っていることは明らかである。そこでドイツ語の Notker 訳が絶対与格を使っている理由と、両方の訳文に認められる表現形式の相異の根底にあるものがこの比較からも分明になってくる。

これまでに見てきたように、たとえ古高ドイツ語の絶対与格の構文が翻訳による借入の、そしてまた文体的にはいまだ生硬な表現形式であるとは

いえ、本稿に掲げた例文にみるように、その用法には古高ドイツ語の翻訳文献資料を通じてそこに共通するもののあることが認められる。Otfridのようにオリジナル性の高いといわれるものでも、その点に関してはほとんど大同小異である。これまでの考察の結果を踏まえて、古高ドイツ語の絶対与格構文の成立の背後にあって、そもそもその生成の駆動的要因を求めるといふ観点から、古代ドイツ語ならびに広く古ゲルマン語の類縁する現象をも比較考量しつつ探ってみることにしよう。

古高ドイツ語の文献にみるところでは、この絶対与格の構文も適応に限界があって多少の違和感は免れないものの、その当時の言語感覚に大きな距離をおくものではないことは既にみたところである。まず与格に与えられた文法機能に焦点を絞って検討してみるならば、古ゲルマン語では既に印欧語の持っていた具格 (Instrumentalis)、所格 (Lokativ) それに奪格 (Ablativ) の一部が与格に統合吸収されていた。そこで問題のラテン語の奪格構文に対応する与格構文の与格については、この格に統合された所格と具格の機能に遠因を遡ってもとめることができるのではないか。例えば I. Dal⁴ がゴート語で所格に代わる与格の用法のなかの時間に関するものとして次の例をあげている、

þamma daga (その日に)
jera hwammeh (毎年)
dagam jah nahtam (昼も夜も)
lagga hweilai (長い間)

また Heliand にも次のような例がある、
217 fernun gere (その前の年に)
693 morga gihuuem (毎朝)
603 huuilon (ときどき)

古高ドイツ語からは

unserem zitim (われわれの時代に)
Otfrid V, 25, 62
sâr thên wilon (ちかごろ)
V, 10, 31
sâr io thên stuntûn (このときすぐに)

Tatian 4, 16

allen unsaren tagun (私たちの全生涯にわたって)
(omnibus diebus nostris) (ラテン語は奪格)

Monseer IV, 11

dem wehhatagum (安息日に) sabbatis

中高ドイツ語からは

Walther 16, 25

kurzwilen (しばらくすると)

Vridank 31, 16

hiute liep morne leit

deist der werlde unstaetekeit

(今日は喜び。明日は悲しみ、これぞ世の無常というもの)

などが傍証として挙げられるが、ここに念のためゴート語からもう一つの例を引用しておくと、

Mc. 1, 32

andanahþja þan waurþanamma berun du imma

(夜になると彼らは彼 (=キリスト) のところへ連れて来た)

ὄψίας δὲ γενομένης ἔφερον πρὸς αὐτὸν

(ギリシャ語の原典では属格)

このゴート語の例文にみる与格の用法はほとんど古高ドイツ語の絶対与格の構文と構造的にもまた機能的にも、すなわち定動詞構文への時間的関連を表示するという点からも、類縁と言うよりはむしろ同根のものともみて差し支えない。さらに原典のギリシャ語との比較からも明らかのように、そこに立つ格もそれぞれの言語の慣用に応じて固有の形式をとっている。

このようないわば裸の与格に対して、機能的には全く異なる点はないが、この与格が前置詞を伴って現れることがある。この時に立つ前置詞はほとんどすべての古ゲルマン語に共通して、

at かまたは *bi*

である。ここに注目すべきは、この二つの前置詞が共に時間の表示を主な機能としていることに併せて、それが定動詞の表す動作なり、状態の進行と同時平行的な時間的関連を表すというのがその特質とするところであ

る。この点に着目しておきたい。詳しくは後に触れることとする。

さてゴート語における絶対与格の構文について、いますこし例を挙げて検討してみよう、

Lk. 3, 1f.

raginondin Puntiau Peilatau Judaia,

warþ waurd gudis at Ioannen

(ポンテオ・ピラトがユダヤをおさめていたときに、神のお言葉がヨハネにくだった)

Tatian 13, 1

forasworgentemo themo Pontisken Pilato Iudam, was gi-
wortan gotes wort ubar Iohannam

とギリシャ語の方は例によって属格の構文になっているが、ゴート語では与格構文に、そしてまたこの箇所当たる Tatian においても同じである。

ところが同じ意味内容をもつ次の同じゴート語の訳では

Lk. 2, 2

at raginondin Saurim Kwreinaiau⁶

(クレニオがシリヤを統治していたとき)

ここには前置詞 *at* の随伴していることに気づく、しかしその意味形態そのものには、なんらの相違はない。ということはまた次の現象とも関係していると考えられる。例えば上に単に与格のみで時間の表示が可能であることを述べたが、ここでもまた前置詞の現れることがある、

Otfrid V, 10, 31

sâr io thên stuntun に対して

Otfrid I, 27, 9

in thên stunton (そのときすぐに)

Otfrid IV, 7, 50

bi alten Noes zîtin (昔のノアの時代に)

という具合に前置詞の有無は意味作用に関して大した相違は窺われぬ。このことは直ぐ前に挙げたゴート語の例についても同様のことが言いうるのである。このことは前に挙げたゴート語の

Mc. 1, 32

andanaht ja ... waur þanamma, berun du imma

(夜になると彼らは彼 (=キリスト) のところへ連れて来た)

とここでもまた同じ意味内容をもつゴート語のつぎの例文についてもいうことができる。

Mt. 8, 16

at andanaht ja þan waur þanamma⁷

(夜になると)

いまそれ以外の古ゲルマン語からの引用を手掛かりに考証してみよう。まず古英語からみると⁵,

gefultumigendum Gode (神のお力添えがあれば)

(*deo favente*)

him sprecendumhi cōmon

(彼が話をしている間に彼らがやってきた)

(*eo loquente veniunt*)

gewunnum sige (勝利を手にするや)⁸

こうした前置詞を伴わないのに対して

Beowulf 2665

be ðe lifigendum (汝のこの世にありしとき)

と前置詞 *bi/be* のついた表現も認められるのである。勿論このときの前置詞の意味するところは時間的な意味であり、しかも同時平行的な併行を意味している。

これを今度は古アイスランド語に類似したものを求めてみるならば、

lidnum þeim sjau vetrum (七年が過ぎ去ったとき)

þessum þrettán útgengum⁹ (三日という日にちの経ったとき)

noðkorre stundo liþenne (少し時間が経過してから)

このように前置詞の随伴しない形に対して

at liþnom þrimr vetrom (三度冬が経過した後、三年後)

epter Ingjald liþenn (Ingjald が死んだ後)

at durom upp luknom (扉が開いた後に)

at upprennande sólo¹⁰ (太陽が上がったとき)

前置詞のついた語法もある。これらの古高ドイツ語以外の古いゲルマン語に現れる与格構文を比較検討して見た場合、かりにこの構文が翻訳上の表現技術としての文体に関する事柄ではあっても、これらのゲルマン語に共通する一連の現象から、またこの構文に与えられた共通する時間的な、しかも定動詞との同時性並びに、併せて付帯的な条件を付与するという機能の点からも命脈の相通じるところがある。このことを勘案するとき、先に挙げた Isidor や Monseer などの次の現象も容易に理解できるのである。

Isidor 38, 17

bi sinermu fatere lebendemu (かれの父の生きてありしころ)

21, 11

after Moyses quhidim (モーゼの語った後で)

Otfrid IV, 19, 17

mit wangon tho bifilten bigan er antwurten

(頬を打たれるや彼は答えて言った)

Notker II, 87, 11

die mit ferhártemo hérzin newéllen kelóubic

(彼らは(=関係代名詞)心を固くきめて信じようとしぬ)

(ferharten<ferherten=*nhd.* verhärten の過去分詞)

また次のようにゴート語と Tatian の聖書のなかの同じ箇所訳に

Mt. 8, 5

innatgaggandin imma in Kafarnaum

Tatian 47, 1

mit thiú her tho ingieng in Capharnaum

(彼がカペナウムの地にはいりしとき)

ゴート語はギリシャ語の与格を、Tatian はラテン語の定動詞の構文をそれぞれ下敷きしているのだから、訳の表現法に違いがあるけれども、ゴート語の訳をもって直ちに直訳とはいきれないところがあるように思う。

最後にこれまでの考察の結果をまとめて結論づけるならば、本稿に論ずるところのラテン語の絶対奪格構文の古高ドイツ語での翻訳文献にみるドイツ語の絶対与格の構文については、これまでは翻訳のための借用からく

る技術上の問題、なかでも表現形式に関わる現象面での問題として取り扱われる傾向があった。しかしこれも単にそれだけのこととして片づけられない側面の内在していることもまた見逃すことのできないことである。この稿では意味機能と構造の面に分けて考えてきた。機能的には定動詞との同時的な事象を分詞と具格と所格の機能を併せて取り込んでいる与格との共働によって表すことにある。またその与格は単独で時間的關係を指示する力を持ってはいるものの、前置詞を従えることによってその表示能力を高めることがあった。そのようなことは、古いゲルマン語にはほぼ共通に認められることであるとともに、またゲルマン語の歴史の趨く動向に副うものでもある。そして本来の与格のもつ特質の延長線上に翻訳というこれまでにない新しい事態に直面するなかで文体上の技法として生み出されてきた¹¹。

構造上の形式の点に関して言うならば、一般に分詞が与格の名詞に先立つ位置に置かれるが、ただしそれが代名詞である場合には代名詞が先にくることが多い。一つには付加語的な用法との機能上の相違によるものであり、ほかに意味的に、また形式の面で軽く短いものを先にもってこようにする言語の本質的特性によるところがある。

そのような事情の中にあってラテン語の奪格構文が古高ドイツ語への翻訳の中で与格構文によらずに、定動詞による文の形を備えた叙述文に改められている例も一方にはかなり多くある。それは概して元のラテン語の奪格構文が時間的な意味合いをもっていないことによる。

翻訳という文章言語の技術に関わるところに起源をもつが故に不自然さの残ることは逃れ難いが、それでも徐々に慣用化されていき、中高ドイツ語の時代にまで引き継がれていく。しかしその一方で与格に代わる主格または対格による構文を前にして慣用の度合いは減退を余儀なくされ、新高ドイツ語の時代になって新たにフランス語からの影響を受け、主格もしくは対格の名詞による絶対構文が頻度を増すことになる。しかしそこには古高ドイツ語の時代に翻訳の文体に関わる一つの手法として産みだされた絶対与格構文の語法が、このような形で現代にその蔭を揺曳させていることを知るのである。

注 (Anmerkungen)

- 1 Sommer, F.: Vergleichende Syntax der Schulsprachen. S. 104.
- 2 Erdmann, O.: Untersuchungen über die Syntax der Sprache Otfrids. II. S. 259f.
- 3 Behaghel, O.: Deutsche Syntax. II. S. 430f.
- 4 Dal, I.: Kurze deutsche Syntax. S. 35.
- 5 Quirk, R./C. L. Wrenn: Old English Grammar. S. 66.
- 6 こてのゴート語に対するギリシャ語は前の Lk. 3, 1f. のと全く同一で、ギリシャ語絶対属格の構文になっている。
- 7 ギリシャ語では Mt. 8, 16. はもともと、絶対属格構文で次のように表されている、

ὄψις δὲ γενομένης

- 8 Quirk, R./C. L. Wrenn: Old English Grammar. S. 98. このことについて、Absolute expressions are most frequently temporal in function, but they often relate to manner; they are also used causally, conditionally and concessively.
と説明し、その機能としては主に temporal であるとしている。また Wessén も (Schwedische Sprachgeschichte. III. S. § 162. § 99),
Wahrscheinlich sind diese Partizipialkonstruktionen ein Erbe aus sehr alter Zeit, als noch kein Gliedsatzsystem ausgebildet war, Das Partizipium conjunctum ist m. a. W., als Typus betrachtet, eine ursprünglichere syntaktische Konstruktion als der Relativsatz, der Ablativus absolutus eine ältere Ausdrucksweise als der temporale Gliedsatz. といつて両者ともこの分詞構文が定動詞構文に時間的な関連において立つものであり、また Wessén は非独立文としては関係文よりもその歴史の古いことにも言及している。
- 9 Hirt, H.: Handbuch des Urgermanischen. III. Teil. III. S. 182.
- 10 Heusler, A.: Altisländisches Elementarbuch. S. 137.
- 11 S. Sonderegger も古高ドイツ語の Isidor 訳などに見られる絶対与格を伴う分詞構文について次のように述べている、(Althochdeutsche Sprache und Literatur — Eine Einführung in das älteste Deutsch. Sammlung Göschen 8005. S. 103f.),
Lateinische Partizipialkonstruktionen, die in der wenig späteren Ta-

tianübersetzung aus Fulda noch recht häufig ungenauer als solche auch im ahd. Text erscheinen, sind in der Isidorübersetzung aufgelöst, wie überhaupt der Übersetzungsvorgang semantisch und syntaktisch ungewöhnlich differenziert, z. T. leicht erweitert erscheint.

年代的にも Isidor 訳とはそれほどの隔たりのない Tatian にもこの分詞構文はかなりよく現れるけれども, Tatian ではいまだラテン語からの直訳による借用構文的な用法の域を脱していない。それに比べると Isidor 訳ではそもそも翻訳全般が意味の上でも, 並びに統語の面でも大変きめ細やかな配慮がなされていることを指摘し, 分詞構文に関しても同様, 時に意訳することによって, 解きほぐされた滑らかな表現での訳がなされていると説いている。

略 語 説 明

- Lk.....ルカ伝 (Evangelium des Lukas)
Mc.....マルコ伝 (Evangelium des Markus)
Monseer ...Monsee-Wiener Fragmente
Mt.....マタイ伝 (Evangelium des Matthäus)

参 考 資 料

I. 刊 本

1. *Althochdeutsches Lesebuch*, hrsg. von W. Braune. Fortgeführt von K. Helm. 14. Aufl. bearb. von E. A. Ebbinghaus. Tübingen 1962.
2. *Althochdeutsche Literatur*, hrsg. von H. D. Schlosser. Fischer Bücherei. Bücher des Wissens. Nr. 6455. Frankfurt 1980.
3. *Der althochdeutsche Isidor*, hrsg. von H. Eggers. Tübingen 1964 ATB. Nr. 63.
4. *Notkers des Deutschen Werke*, hrsg. von E. H. Sehr/T. Starck. Bd. 1-3. alle 1933-1955 ATB. Nr.32-34. 40. 42. 43.
5. *Sammlung kleinerer althochdeutscher Sprachdenkmäler*, hrsg. von G. Köbler. Arbeiten zur Rechts- und Sprachwissenschaft 30. Gießen-Lahn 1986.
6. *Otfrids Evangelienbuch*, hrsg. von O. Erdmann. 5. Aufl. von L. Wolff. Tübingen 1965 ATB. Nr. 49.
7. *Tatian*, Lateinisch und altdeutsch, hrsg. von E. Sievers 2. Neubearb.

2. Aufl. Paderborn 1892.

II. 参考文献

1. Behaghel, O.: Die Syntax des Heliand. Wien 1897.
2. Behaghel, O.: Deutsche Syntax. Eine geschichtliche Darstellung. Bd. 1-4. Heidelberg 1923-32.
3. Braune, O.: Althochdeutsche Grammatik. 12. Aufl. bearb. von W. Mitzka. Tübingen 1967.
4. Brinkmann, H.: Sprachwandel und Sprachbewegungen in althochdeutscher Zeit. Jena 1931.
5. Dal, I.: Kurze deutsche Syntax auf historischer Grundlage. 2. verb. Aufl. Tübingen 1962.
6. Eggers, H.: Vollständiges lateinisch-althochdeutsches Wörterbuch zur althochdeutschen Isidor-Übersetzung. Berlin 1960.
7. Eggers, H.: Deutsche Sprachgeschichte I. Das Althochdeutsche. Rowolt Taschenbuch Nr. 185/186. Reinbek b. Hamburg 1968.
8. Erdmann, O.: Untersuchungen über die Syntax der Sprache Otfrids. T. 1-2. Halle 1974. 1876.
9. Erdmann, O./O. Mensing: Grundzüge der deutschen Syntax nach ihrer geschichtlichen Entwicklung. Abt. I. II. Stuttgart 1886. 1898.
10. Fourquet, J.: L'ordre des elements de la phrase germanique ancien. Etudes de syntaxe de position. Paris 1938.
11. Heusler, A.: Altisländisches Elementarbuch. 3. Aufl. Heidelberg 1932.
12. Hirt, H.: Handbuch des Urgermanischen. III. Teil. Heidelberg 1934.
13. Paul/Moser/Schröbler/Grosse: Mittelhochdeutsche Grammatik. 22. durchgesehene Aufl. Tübingen 1982.
14. Quirk, R./C. L. Wrenn: An Old English Grammar. London 1977.
15. Schützeichel, R.: Althochdeutsches Wörterbuch. Tübingen 1969.
16. Sehart, E. H.: Notkers-Glossar. Ein Althochdeutsch-Lateinisch-Neuhochdeutsches Wörterbuch zu Notkers des Deutschen Schriften. Tübingen 1962.
17. Sommer, F.: Vergleichende Syntax der Schulsprachen. 4. Aufl. Stuttgart 1959. (Nachdruck der 3. Aufl. 1931)

18. Sonderegger, S.: Althochdeutsche Sprache und Literatur. Eine Einführung in das älteste Deutsch. Darstellung und Grammatik. Berlin 1974.
19. Streitberg, W.: Gotisches Elementarbuch. 3. und 4. verb. Aufl. Heidelberg 1910.
20. Weimann, K.: Einführung ins Altenglische. UTB-Taschenbücher 121.
21. Wessén, E.: Schwedische Sprachgeschichte. III. Berlin 1970.

Zum Gebrauch des althochdeutschen Dativus absolutus

Takeshi TESHIMA

Über den Gebrauch des althochdeutschen Dativum absolutus habe ich in der vorliegenden Untersuchung an Beispielen und Belegen ziemlich eingehend behandelt, und es zeigt sich dabei seine stilistische Eigenschaft wie folgt:

Der offensichtlich lehnsyntaktische Charakter absoluter Dativfügungen im Althochdeutschen findet seine Bestätigung in den Nachbarsprachen. Im Altenglischen erweisen sich die entsprechenden Partipialbildungen im Dativ oder Instrumental deutlich als Fremdkörper. Im altsächsischen „Heliand“ fehlt aber jedes Beispiel. Die altnordischen Belege weisen wohl ebenso auf lateinischen Einfluß.

Als weiteres vorläufig festgestelltes Ergebnis unserer Untersuchung möchte ich nachdrücklich darauf hinweisen, daß absolute Fügungen dort, wo sie innerhalb der Texte von Isidor und Monsee-Wiener Fragmente in Kongruenz zur Vorlage dennoch eindringen, nicht willkürlich gebraucht sind, sondern in der Beschränkung auf offenbar stilistisch genutzte Formeln genau umreißbarer Qualität erscheinen. Es fand sich erstens ein Typ der Redeeinführung mit Partizipium Präsens, zweitens ein Muster Pronomen plus Partizip, ebenfalls mit Partizipium Präsens, wobei in beiden Fällen ein vorherrschend temporales, Gleichzeitigkeit einer Handlung oder eines Zustandes bezeichnendes, d. h. ein recht einheitliches Funktionsmerkmal faßbar wird, und dabei auch gelegentlich ist 'Instrumental-Bedeutung' noch zu verspüren. Dieses einheitliche Merkmal ist insofern festzuhalten, als wir es im Sprachgebrauch Otfrids und Notkers wieder finden.